

2016

第1回 世界ご当地エネルギー会議
The 1st World Community Power Conference
2016年11月3日(木/祝)・4日(金)コラッセふくしま November 3rd - 4th, 2016 Corasse Fukushima

第1回世界ご当地エネルギー会議

1st World Community Power Conference

インターンレポート
Intern Report

introduction

Welcome to the **1st World Community Power Conference Intern Report.**

Despite our varying backgrounds, we, as interns, all found ourselves drawn to the **Institute for Sustainable Energy Policies (ISEP)** and its social mission of encouraging a sustainable energy transition in Japanese society. So, for many of us, attending the 1st WCPC in Fukushima gave us a chance to explore the concepts we've learned about throughout our academic careers and engage with experts in our respective fields.

The 1st World Community Power Conference sought to facilitate an open forum for experts from around the world to engage and discuss the role of community power in the global shift towards renewable energy. In addition, the 1st WCPC panels were able to consider possible global community power strategies, and their national and local implications.

This intern report was created to review and further develop the conclusions we drew from our experience attending the 1st WCPC. Therefore, each intern was asked to answer the following questions with regards to how this conference will affect our future trajectories.

- 1) What was our role?
- 2) What presentation we liked the most and why?
- 3) Any other important information for future interns
- 4) Personal Reflection
- 5) In 10 years, what would you present about at a similar conference?

To all future interns, we hope that you will learn from our experiences, and continue to seek out opportunities that promote both scholarship and collaboration on a global scale.



はじめに



私たちインターンは、みな異なるバックグラウンドを持ちながらも、環境エネルギー政策研究所 (ISEP) に関心を持ち、日本を持続可能なエネルギー社会に転換していくという社会的なミッションに興味を持ちました。福島での第1回世界ご当地エネルギー会議 (WCPC) に参加したことで、これまでの学業を通して学んできた考え方やコンセプトを深く理解することにつながり、それぞれの分野の専門家と出会うこともできました。

第1回WCPCでは、世界中の専門家が自然エネルギーへの国際的な移行においてコミュニティパワーが果たす役割を議論するための開かれた場作りを進めようとしていました。加えて、各セッションでの議論を通じて、国際的なコミュニティパワーの戦略や、国ごと・地域ごとの示唆について考察する機会となりました。

このインターンレポートは第1回WCPCに参加したそれぞれの経験から得られたものを振り返り、さらに発展させるために作成しました。各インターンは、この会議に参加したことがそれぞれの将来にどのような影響を与えるかについて、以下の質問に回答しました。

1. 会議中でのそれぞれの役割
2. 会議を通して最も印象に残ったことを1点
3. 今回の会議を通して何を考えたか
4. 未来のインターン生や、知人友人に伝えたいこと
5. 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か
6. 開催地の福島について思うこと

未来のインターン生に対しては、私たちの経験から学び、世界的な規模での学びと協働につながる場や機会を探し続けることを期待しています。

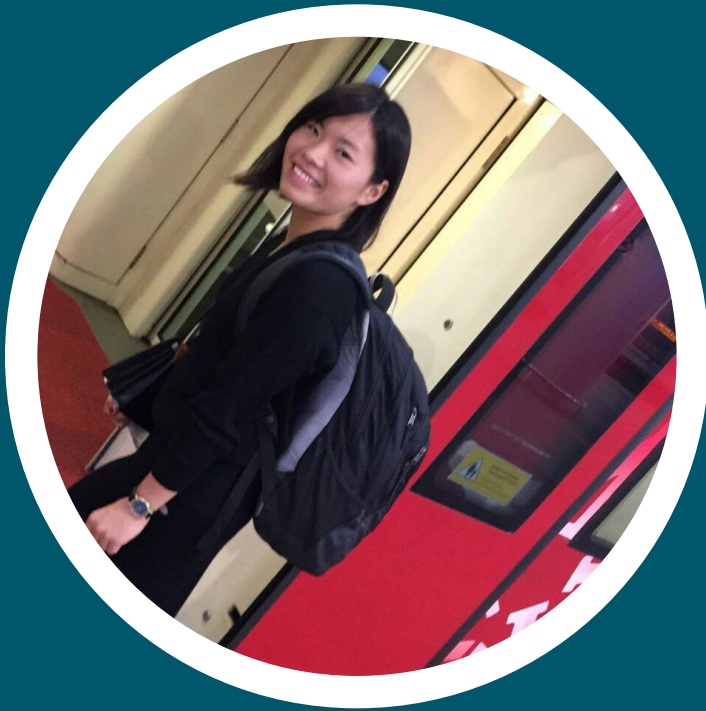
杉崎

sugisaki akane

College: Obirin University
(桜美林大学)

Major: Environmental Studies
(環境学)

Hometown: Saitama, Japan
(埼玉県)



1) 会議中でのそれぞれの役割 受付

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

公式晩餐会: ゲストスピーカーだけではなく、再エネ業界では有名な教授や研究者、行政公務員の方をはじめ、地域主導型事業をされているお馴染みの方々までとにかく豪華メンバーでした。数時間の短い間でしたが、色んな方々とお話することができました。特に様々なところで面識はあってもちゃんとお話したことが無かった方と接触できたのはとても良かったです。みなさん非常に積極的に活動されていて、地域内での発電事業だけでなく、活動自体を広めようと様々な取り組みされているなど、とても刺激になりました。

3) 今回の会議を通して何を考えたか。

多くのことを考える機会が沢山ありましたが、特に今後社会人になる上で教訓になったことを3つ書きたいと思います。

①ネットワークを構築すること

②機会を逃さないこと

③予習をしっかりとすること

まず一つ目については、コミュニケーション力と勇気をフル動員して、色んな方とお話すべきだなと感じました。当たり前のことかもしれませんが、ここでの繋がりが、次回の第二回会議や将来会った時に、得たり共有できる情報量や質が大きく異なるのではと思いました。スタッフに言われたことでもあります。ビジネスや研究でお互いに有益な関係を持つことは大事なことです。頑張ります。

②自分のステップアップにつながるチャンスは思いもかけないところ、時にやってくるものだと思います。それまでの自分自身の行動や勉強してきたことが絶対活かされるはずなので、そこを上手く好機と繋げて、一瞬のチャンスを逃さないようにしたいとこの国際会議で痛感しました。

③受付をしているときに、今回のゲストスピーカーについてスタッフから様々なことを教えていただきました。パンフレットだけの情報では分からない、その人物のキャリアやなぜこの場に呼ばれたのかなど、興味深いものばかりでした。せっかく本人をお会いしてもそのことを知っているか否かで、聞ける話も自分が話したいことも大分変わるなと思いました。

4) 未来のインターン生や、知人友人に伝えたいこと

この国際会議が次いつ日本で開催になるか分かりませんが、大学の友達や高校生・中学生など様々な専攻分野、年齢の人を誘って参加してもらいたいと思います。

5) 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か。

私は来年度から再エネ事業関連の会社に就職する予定です。今回の会議では研究者や市民事業が多く、再エネを本業とする一般企業の参画が薄いと感じました。民間企業の立場から国内あるいは海外の再エネ開発についてお話しできたらと思います(開発部署配属になっているかわかりませんが・・・)。私が再エネ業界で達成したい目標は、一段階上の開発事業です。

- ・発電所施設を持つ地域と運営側がwin-winな関係を持つような事業形態をスタンダードにすること

- ・既存の開発方法ではなくより人々のライフスタイルに沿い、消費者が意識的にエネルギーを考えられるような啓発的で機能的な発電所を作ること

今後10年でエネルギー業界や国の政策などが変化するか不安ではありますが、同じくらい楽しみでもあります。私の目標が叶ったら是非登壇者として呼んでください(笑)

6) 開催地の福島について思うこと

小学校の修学旅行から、おいしい地酒まで色々お世話になっているところですが、私が自然エネルギーを学ぼうと思ったのも、将来選択にエネルギーを入れるキッカケになったのもこの場所のおかげだと思います。原子力発電事故が起こってしまったのはとても悲惨なことです。しかし私をはじめ多くの人々を動かす原動力になったはずです。自然エネルギー普及を牽引する福島県に続く地域の発電事業に助力できるような人材になりたいと思います。

今野

konno ibuki

College: Tokyo Institute of Technology
(東京工業大学)

Degree: Social Engineering
(社会工学)

Hometown: Minamisouma City, Japan
(福島県南相馬市)

1) 会議中でのそれぞれの役割

主な役割は、会場の受付・案内、第三会場のビデオカメラ撮影及びレシーバーの管理でした。

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

キューバやメキシコ、パキスタン、マリ、そしてレソトなど、世界の様々な場所でコミュニティパワーの普及に取り組む人達が参加したことと、そのネットワークの広さに驚きました。

3) 今回の会議を通して何を考えたか。

コミュニティパワーの普及には、その地域の実情に共感し、「なぜこの地域が再エネを導入しなければならないのか」という問いに答えを示すことが不可欠であると感じました。

FITが導入されてしばらくが経過し、再生可能エネルギーの導入が進むにつれて、巨大資本の大規模開発による弊害が各地で顕在化しています。それはFITにより事業採算の予見性が高まったため、明らかに儲け目的の事業が、とりわけ地方で行われてきたがためです。それら事業は地域に地方税などを落とすものの、儲けのほんの一部でしかなく、地域住民にしてみれば、儲けのために負担ばかりが押し付けられているというような印象を持たれても無理はないと思います。つまり、その地域がなぜ再エネかという問いに対して、答えを示すことができていないことがその問題であるのだと感じました。

そんな中であって、コミュニティパワーは儲けが第一の目的ではないようです。同じく再エネを用いているものの、あくまで地域の活性化が目的であり、そのツールとして再エネを活用しているに過ぎません。なぜ再エネかという問いの答えは、地域に根ざしたその事業の仕組みに内在しています。

こういった取り組みが各地で普及すべきと思いますが、残念ながら、多くの地域では人材やお金、技術、情報が乏しく、結局は問いの答えを他人任せにしているのが現状であるようです。この会議は、そういった問いに自ら答えを出せるチャンスがある場であるということを強く感じました。会議には、実際にその問いの答えを研究する研究者、実践している事業者や役人、政治家などが集まりました。こういった場でネットワークを築くことにより、自分の地域の実情に合ったコミュニティパワーの仕組みを考える上で有益な情報が得られるようになるのだと思います。

私自身も、今後ネットワークを広げつつ、この問いについて常に念頭に置き、地域の目指す発展のために再エネがどのような貢献ができるかを研究して、システムを提案できるようになりたいと考えています。



4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと

ISEPのインターンでは、再エネに取り組む多くの人に出会う機会に恵まれます。それは、ただ大学で過ごしているだけでは得難い人脈だと思います。

再エネ、特にコミュニティパワーは日本ではまだまだ発展途上国の分野です。一方、世界に目を向けると多くの先進事例があり、先駆者達がいまいます。もし、将来的に再エネに係る仕事を視野に入れているのであれば、彼らから学ぶことはたくさんあるはずですので、そういったネットワークを構築する上でも、ISEPのインターンシップはとても素晴らしい場であると感じています。

私自身も、将来このネットワークの一員として皆様にお会いできるようになりたいと思いますので、その時はどうぞよろしくお願いいたします。お互い精進していきましょう！

5) 10年後会議に登壇した場合、話したいことは何か

現在蓄積されつつある日本のコミュニティパワーの仕組みを10年後の社会にいかに応用して、拡散させることができるか、そのアイデアを提案したいです。

再エネの動向は今まさに成長期にありますが、10年後は成熟期になっていると思います。特に先進国においては導入する土地が次第に限られ、もしかしたら衰退期に入りつつあるのかもしれませんが。一方で、さらに次の10年の間に今ある設備の更新期が一気にやってきます。ですので、そのときにコミュニティパワーの仕組みが活かせるように、そのまま衰退してしまわぬように、知見や知恵、経験を共有し、人口減少社会に適した新たなあり方を提案できればと思います。

6) 開催地福島について思うこと

福島県は私の出身地であり、個人的な思い出があるつもりです。しかし大学の4年間は、震災や原発事故の被害を肌で実感する度に、どうしても心のどこかで「自分は被害者だから」という受け身の思いが強くなっていたように思います。

そんな中、インターンの活動等を通して、福島のために奮闘している人達や、福島に関心を持っている国内外の人達がたくさんいるということを知り、自分には何ができるのだろうということを考え始めるようになりました。これからは受け身の姿勢でいるのではなく、やるのであれば使命感を持って取り組むという思いで、故郷福島に向き合っていきたいと思います。

寺澤

terasawa takayuki

College: Tokyo University
(東京大学)

Degree: Economics
(経済学)

Hometown: Tokyo, Japan
(東京都)



1) 会議中でのそれぞれの役割

受付、カメラ撮影、レシーバーチェック

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

懇親会で再生可能エネルギー普及の最前線で活躍されている方々と直接お話しすることができたことです。会津電力の佐藤彌右衛門さん、飯舘電力の千葉訓道さんや近藤恵さん、小田原市の加藤市長など普段講演で壇上にいる方々とお話し出来たのは貴重な経験でした。特に加藤市長は、中学二年生の頃に単独インタビューをさせて頂いた御縁もあり、10年ぶりに果たした再会は感無量でした。

3) 今回の会議を通して何を考えたか。

世界中の人々をつなぐ“架け橋”としてのISEPの重要性を改めて感じました。会議中、スタッフの指示でベルリン大学の学生の通訳をしたのですが、熱心な彼女の姿勢が伝わったのか無事に日本の自治体の方々とのインタビューの約束を交わすことが出来ました。また、懇親会で加藤市長が「他自治体の様々な先進事例を直接知ることが出来たし、視察など今後の取り組みの足掛かりも出来た。今回の会議に参加して本当に良かった。」と笑いながら語りかけて下さいました。これらの経験から私が感じたのは、“直接会う”ことの重要性です。ICT技術の発展により、情報入手や連絡など格段にしやすくなりましたが、やはり本当に重要な情報・信頼関係は直接会わずして得られないのではないのでしょうか。しかし、全く知らない人同士が直接会う機会を生み出すのは困難です。だからこそ、再エネ・ご当地エネルギーの可能性を信じる世界中の人々を一堂に集める今回の世界会議は新たな絆を生み出す意義深いものだと思いますし、世界中にネットワークを持ち世界会議という“場”を創ることが出来るISEPの貢献の大きさに対して感嘆の思いを禁じ得ませんでした。

4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと。

ISEPのインターンをしていると大小問わず様々な会議・イベントの運営補助の仕事をする機会があります。これらは一見地味で単調な仕事と思われるかもしれませんが、意外と主体性が求められる学び多い仕事だったりします。というのも、事前に役割が与えられて仕事内容の説明は受けませんが、いざイベントが始まると想定外の事態が多々発生し、インターン各自の判断が必要になるからです。想定外の事態に動じずに、冷静に全体を見て、一番必要な行動を起こすという一連の作業を能動的に行わねばならないため指示待ちの気楽な気持ちでいると焦ります。対応する課題は、例えば報告書用の良い写真を撮るためにカメラ担当者の役割分担をどうするか、極力待ち時間を減らすためには受付のオペレーションをどうするかといった“小さい”ことではありますが、こうした小さな課題解決の経験が積み重なり、将来大きな仕事を成功へと導くのではないのでしょうか。結局言いたいことは、イベント運営補助も気持ちの持ちよう次第で実り多い仕事になるということです。

5) 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か。

来年から私は政府職員として働き始めるので、高確率で10年後も政府職員として働いているでしょう。そんな私の希望は、世界に誇ることが出来る日本の持続可能型社会実現のための取り組みについて会議で話すことです。

正直なところ現在日本は、経済面だけでなく社会面・環境面の持続性を意識した経済社会システムづくりにおいて世界的に遅れていると思います。再エネに関して言えば、2012年にFITができ、またISEPやご当地エネルギー事業者といった民間の方々の努力によって着実に普及は進んでいますが、系統接続・資金調達など課題も多く世界的にみると伸び悩んでいます。パリ協定の国際的枠組み作りやグリーンファイナンスの分野でも欧米の後塵を拝しています。

こうした状況を今後は官・民双方の力で改善し、持続可能型社会づくりにおいて世界を牽引できる責任ある真の大国に日本を生まれ変わらせ、将来成果と共にそこに至る苦労話を会議でお話することができればいいなと思います。

6) 開催地の福島について思うこと

日本で3番目の面積を持つ福島県は、豊かな自然と農産物を誇る地域として知られていますが、私は福島県が本当に誇るべきは“人”ではないかと思います。とにかく地域のために何かしたいという熱い想いを抱いて行動を起こす人々が日本で一番多い地域ではないかと思うのです。

私が直接知っている人々は会津電力・飯館電力など再エネに携わる方々が多いのですが、原発事故で一回自分たちの故郷が失われる可能性を身をもって体験した福島の人々は、故郷を守るためには国任せではなく自分たちで主体的に行動を起こさねばならないという意識が強く、再エネによって地元の自然の恵みを自分たちに還元し、経済的にも自立することを目指しています。

東京一極集中が進む中で現在日本の多くの地域が消滅の危機に直面していながら、来るべき未来が遠すぎて実感が湧きづらいせいか、具体的に地域を守るための大きな動きを市民主体で形成できている地域は少ないと思います。そんな中、原発事故を契機に人々が覚醒した福島県は、持続可能な地域づくりにおいて成功モデルを作れるポテンシャルが高く、今後の日本の地方部のトップランナーになれるのではないのでしょうか。逆境をチャンスに変える、そうした期待を思わずいられない地域です。

野津

notsu ryosuke

College: Dokkyo University
(獨協大学)

Degree: German Studies
(ドイツ語専攻)

Hometown: Saitama, Japan
(埼玉県)

1) 会議中でのそれぞれの役割

会議では3つの会場が用意されており、会議中はそれぞれの会場にて異なるテーマが同時進行されていました。会場設営を終えた後、私たちインターン生には、受付・通訳の方や登壇者の案内・映像や写真記録・通訳音声流れる端末(レシーバー)の管理・個別のスタッフ対応が割り振られていました。私は一番大きなメイン会場にて、主に写真記録係とレシーバー管理を担当していました。

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

当日、会場には日本だけでなく世界各地から多様なバックグラウンドを持った大勢の方が集まり、終始、熱のこもった議論が展開されていました。まず、その熱量や雰囲気深く感銘を受けました。しかし、私にとって最も新鮮な経験となり、多くの学びが得られたのは会議後に催された懇親会や晚餐会であったと思います(会議中は写真記録やレシーバー管理などでなかなか落ち着いていられなかったのもあるかもしれません)。懇親会や晚餐会は会議中に比べて、普段なかなか関わることのできない第一線で活躍される方と、より近くで対話ができる極めて貴重な時間でした。また、会議というオフィシャルな場ではなく、ある程度リラックスした空間ならではの幅広く親密な情報共有ネットワークが構築されていく様子を体感できました。これは、大学に通い、比較的限られた人数・空間において、エネルギーや環境などを議論することの多かった私にとってはとても新鮮な体験でした。そして、こうした国際色豊かな社交場では、自分から声をかけ、拙くとも英語を話すなど、積極性が何よりも重要になります。実際に会場にいらした方は皆さん、私たちインターン生に対して、プライベートな話を交えながら温かく迎えてくれました。しかし、私は少し遠慮が出てしまったり、失礼のないようにと考えるあまり、思うように振る舞えなかったことに悔いが残ります。ここにおいては私の今後の課題を身をもって認識できたと思います。



3) 今回の会議を通して何を考えたか。

第一に、今回のような、持続可能なエネルギー(「ご当地エネルギー」)の実践について、横断的な情報共有ネットワークや連帯感を強める機会の創出が絶えず継承されていてほしいと心から思いました。とりわけ、国家や産業、私たちの暮らしを根本から支えるエネルギーを題材に、継続して情報共有を試みることで「私たちがどのような社会を望むか」という普遍的な議論に繋がれると感じます。

また、一般的に、再生可能エネルギーは新興の技術であるがゆえに課題も残るとされますが、気候変動・地球温暖化対策や持続可能な発展、地域活性化の重要度が増していくのに合わせて、その期待は着実に大きくなっています。そして、そうした「調和」や「安寧」をもたらすことを望まれているからこそ、再生可能エネルギーを用いた「ご当地エネルギー」は、当該地域で生活する人々との互惠関係を築くための対話や利害調整が不可欠になります。そして、今回の世界ご当地エネルギー会議では様々な議論を通じて、そうした社会的な価値を追求する過程においてこそ、誰もが当事者たり得て、創意工夫の可能性が多く秘められているという学びがあったように思います。

4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと。

とある事業者がご当地エネルギーに参入するのにも、1人の学生がインターンへの参加を選択するのと同じように、何かしらの動機があって、新しい領域に足を踏み入れる決断を伴うという点で通底するものがあるようでした。とはいえ、今こうしてISEPでインターンを行っている私は、「思い切って何かを決断する」のがあまり得意ではなく、むしろ慎重で、時にそれが災いしているような気がして、煩悶します。そんな私が、ISEPでのインターンを考えている方や(私と同じように)エネルギーの議論に参加する方策を模索している方にお伝えできるのは、「迷っているときこそ門を叩くべきであって、自分が迷っている状況を誰かに伝えるべき」ということです。そして、その「誰か」は、できるだけ自分が踏み込もうと考えている領域に身を置く「当事者」に近い人物である方がいいと思います。というのも、その人物は現在に至るまでに大なり小なり同じような悩みや感覚を抱えた人物であり、ある種の方法論を持ち合わせていることが多いのです。実際に、今回の会議や懇親会、晚餐会でお会いした方々はまさしく新しいエネルギー事業の「当事者」であって、私に寄り添うようにして、ご自身の経験を語ってくださいました。

5) 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か。

私は、今後自分がどういった形でエネルギーに関する議論に貢献できるのかについて、いまだ迷っている最中です。ですが、私はそうした自分自身の暗中模索の状態(現在の私)から将来にわたる素朴な感覚を大切に、それを交えて「時代の要請に適ったエネルギー事業のあり方」を語ることができればいいな、と思っています。

6) 開催地の福島について思うこと

会議の開催地に福島を選んだことはとりわけ外国からいらした方々にとって、「エネルギーの未来をより当事者として議論するに相応しい場であり、福島が実際にどういう状況にあるか大きな関心があった」という声もあり、やはり大きな意味があったようでした。私たちインターン生も運営に関わる過程で、極めて僅かではありますが、福島で暮らす方々の「エネルギーのことをちゃんと再考してほしい」という切実な想いを耳にしました。今後は、そうした声に整然と向き合い、かつ、福島での一件を日本全体や世界に敷衍して考えられる力を私自身の中で醸成していかなければならないと思いました。

鈴木

suzuki misa

College: Tokyo University of Foreign Studies
(東京外国語大学)

Major: German Studies
(ドイツ語専攻)

Hometown: Tokyo, Japan
(東京都)



1) 会議中でのそれぞれの役割

私は主に第2会場での案内と同時通訳レシーバーの管理を行いました。同時に複数のセッションが開催されていたため、複数聞きたい方の途中での入退場が多く、お席まで案内していました。またプレスの方の受付対応も行いました。多くの新聞、TVの方が来てくださいました。

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

世界中から多くの方が、特に地域主体のエネルギー生産が進んでいるドイツから多くの方が参加してくださったことが印象深かったです。100人を超える外国人の方々の参加は、この会議が国際会議として(次は2年後のマリで)、世界中で続いていくことをアピールしていました。また日本中から菅直人元首相を始め自治体の首長、ご当地エネルギー事業者、生協の方々まで、様々なアクターの方々が参加してくださったことは、日本でもご当地エネルギーを発展させたいという関心の高さを示していたと思います。

3) 今回の会議を通して何を考えたか。

住民出資による企業が電力を供給することの重要性を考えていました。「ご当地エネルギー」では、地域で作ったエネルギーを地域に供給し、そこから発生したお金を地域に還元することを理想としています。オスナブリュックのシュタットベルケ(公社)が、オスナブリュックの住民出資の企業であり、オスナブリュックの再生可能エネルギーの方針を体現していることをプレゼンで聞き、住民とエネルギーを繋ぐ橋渡し役になっていることを感じました。市民個人が普段の生活の中で、エネルギーとの関わりを感じることは容易なことではないと思います。再エネのために余計にお金を出そうという気持ちになることも難しいことです。個人が自分の街の問題として再エネを考える時、再エネを市の方針として理解してくれる自治体と、それに賛同する地域密着型の企業の存在が不可欠なのだなと考えていました。

4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと。

私は今年の初めまででインターンとしての活動は終え、就活等を挟んでいたのですが、今回の福島でのお手伝いは久しぶりのISEPでした。一度ISEPを離れたことで、1つ気づいたことがあったので、未来のインターン生にお伝えしたいです。それは自分がインターンをしていた時、なにか具体的なトピックを深追いしていなかったなという反省です。再エネに関わる分野は非常に幅広くて、ご当地エネルギーもその一つですし、また今回のご当地エネルギー会議で話し合われた内容も多様でした。ISEPに関わる分野も幅広いですから、インターンをしていると本当にたくさんの情報が降ってきます。学生なのですからもちろんインプットは大切なことですが、それをいつか自分なりのアウトプットに変えていくぞという姿勢も大切。自分なりのアウトプットを育てていくためには、漫然と降ってくるものをインプットしてはダメ、なにか今の自分が関心を持っているトピックを大切にしようと思うようになりました。ISEPのインターンはいい意味で自由ですから、ぜひ自分らしさを大切にしてください。

5) 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か。

10年後はわかりませんが、今自分が思っていることについて書きたいと思います。私は再生可能エネルギーがもっと人々の身近なものになると良いなという思いから、ISEPでのインターンを始めました。人々というのは、再エネ業に従事している人だけでなく、普通に街で生活をしている人たちです。ドイツが他の国々よりも再エネに取り組んでいる理由は、より多くの一般の市民が、再エネを自分たちの問題として考えたからではないかと思っています。日本ではエネルギーというと「理系」「自分とは関係ない」「政治的でよく分からない」と敬遠されがちです。もし10年後に登壇するのなら、エネルギーの選び方・使い方がもっと日常になることの大事さを、話したいなと今は思います。

6) 開催地の福島について思うこと

私にとって2回目の福島訪問となりました。1度目は、昨年に福島県庁主催の「福島復興再エネツアー」に参加した時です。このツアーは1泊2日で全国の大学生たちが、福島県の再エネと原発に関わる場所を回るものでした。とまとランドいわきの太陽光発電や、廃炉作業員の中継地である「ヴィレッジを訪れ、また移動中のバスの中からは朽ちかけた家屋や廃棄物の黒い袋の山などを見ました。日常を取り戻しつつある福島に住む方々にお会いできた嬉しさと、まだまだ残っている難しい課題を感じ、複雑な思いで過ごしたことを覚えています。

それから1年半ほど経っての今回の福島滞在でした。世界から「フクシマ＝原発被災地」と思われているかと思いますが、実際に福島に滞在した外国からの参加者の方には、イメージが変わったという方もいるのかもしれませんが。この会議で私は会場周辺だけの滞在だったので、また機会を見つけて訪れたいです。いつか福島原発の視察ツアーに参加できることがあればとも思っています。

柏原

kashihara ikuya

College: Waseda University
(早稲田大学)

Masters Degree: Law
(法学部)

Hometown: Hokkaido, Japan
(北海道)



1) 会議中でのそれぞれの役割

第一会場のディレクターのアシスタント。

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

二日目のプログラムの100%自然エネルギーイニシアチブの中で出てきたキーワードの一つで「地消地産」というものがありました。地域で生産された様々な生産物や資源をその地域で消費する「地産地消」には食の安全性や地域経済の観点から注目が集まり広まっていたのですが、そこから転じた「地消地産」という言葉に僕の中で、すんと腑に落ちる感覚がありました。なぜなら生産した分を消費するのではなく、消費する分だけを生産するというパラダイムの転換は再生可能エネルギーと親和性の高い価値観ではないだろうかと感じたからです。

すでに全国各地の都市で実際に実証実験が行われているデマンドレスポンスサービスやドイツで導入され始めている各家庭で電力を融通し合うシステムなど消費する電力に対応した電力を生産することで無駄を省こうとする、「必要な分だけ」という意識は「地消地産」と通ずる考え方だと思います。

そもそもなぜ再生可能エネルギーの利用や導入を推進しようとするかという、そこそ百人百様の価値観に基づいた目的があると思われそうですが、その大きな一つとして将来に渡って持続可能な社会を創るというのがあると考えられます。そういった社会を志向する中で消費量を前提とした生産という「地消地産」というのは重要な手がかりになると思います。

3) 今回の会議を通して何を考えたか。

今回の会議には、主に行政と研究のどちらかの側面で再生可能エネルギーに関わる人々が本当に世界中から集まっており、多様なバックグラウンドに基づいたディスカッションが常に行われていて驚きが多くありました。登壇者の方だけではなく、一般の参加者の方の熱量もすごく、限られた時間の中でわずかな方しか質問ができていなかったのが致し方無いとは言え、少し残念でした。ただ、一つのプログラムが終了後に至る所で意見交換や議論が行われている光景を目にしました。登壇者の何名かの方がまだまだ再生可能エネルギーのコミュニティは小さいと仰っていましたが、同時に全ての方が希望も持っていました。私自身もプログラム内の熱量やプログラム外の光景を見て、再生可能エネルギーのコミュニティはまだまだ小さいかもしれないけれど、その結びつきはきっと強いはずだと感じました。世界ご当地エネルギー会議の次回は2018年にマリで開催されるそうですが、その時には今回よりも参加者が増え、もっと大きくそして結びつきも強くなったコミュニティになっていることを願いました。

4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと。

大層なことを言える立場では無いのですが、第一に、今回の会議を通じて感じたのは「世界は広い」ということです。自分の想像もしなかった場所で再生可能エネルギーの可能性を信じて活動をしている人や、自分には決して思いつかない方法で再生可能エネルギーの未来を考えている人が世界には沢山いるということを改めて実感しました。ただ、一方でその動きに反対する人々がいるのも確かなことです。何か行動を起こした時に風当たりがあるのは避けられないことです。これはあらゆることに言えると思います。ですから自分のやりたいことを見つけ動き出そうとしたときには周りの否定的な声に必要以上に囚われる必要はないと思います。そして自分の可能性を限定したり否定したりしないでと思います。日々技術は進化しています。再生可能エネルギーの普及も20年前、10年前と比較すると信じられない速さで広がっているように感じます。今は想像すら出来ない事象が10年後には当たり前になっていることもあり得ます。そのような時代に生きている我々だけが固定観念や常識に囚われて窮屈になる必要はないと思います。

また、僕は大学では法学部に所属しており、講義やゼミなどでエネルギーを扱ったことは1度もありません。ただ、ISEPのホームページに掲載されたある体験記を読んで再生可能エネルギーに関して全く知識が無い状態でインターンに参加しようと一歩を踏み出しました。インターンとして様々な活動をさせていただき、今はその決断をして良かったと心から思っています。

僕がそうであったように僕のこの稚拙な体験記が皆さんにとっての何かのきっかけになったらこれ以上の喜びはありません。

5) 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か。

日本の再生可能エネルギーに関連する問題の一つとして法整備の遅れというのが挙げられます。どうしても法律というのは世論や社会の動きのリアクションとしての側面は避けられず持っています。最先端技術を利用した生命倫理の問題やインターネットを用いた新しい犯罪など民法、刑法に関わらず、いかに法律を作っていくのかというのは再生可能エネルギーの分野に限定されない法学会の大きなテーマとなっています。ただ、再生可能エネルギーの場合に特徴的であるといえるのが、再生可能エネルギー導入の際に農地法や電力事業者法等の既存の法律との兼ね合いというのが障害の原因となっていることがあります。この問題にどうアプローチしていくべきなのかという問いに関して今の僕では正直なところ明確な答えを出すことは出来ません。ただ10年後、法律と再生可能エネルギー事業の両面についてもっと学びを深め、自分なりの答えを提示することが出来るような10年を過ごしたいと思います。

6) 開催地の福島について思うこと

東日本大震災から5年が経過し、僕自身の中でその記憶が次第に薄まっていたことは否定できないことでした。風化させてはいけないと分かっているにしても、日々の日常の生活が続く中で、震災直後に考えていたことが自然と頭の隅に追いやられ、思い返す機会が少なくなっていたように思います。そういった状況の中で、被災された高校生や登壇者、さらには関係者の方のお話を伺った時に、震災はまだ終わった出来事ではないということを強く実感しました。日本は地震や台風を始めとした自然災害が多く起こります。その時に個人が直接的に被災地に何か出来ることというのは少ないかもしれません。ただ、そのことを忘れずに、考え続けるということ。よく言われすぎていて、当然のこのように思われていますが、その意識が次の災害の被害の甚大化を防ぐ最善の対策なのではないかと感じました。

瀧上 takigami kou

College: Hosei University
(法政大学)

Major: Faculty of Sustainability Studies
(人間環境学部)

Hometown: Hokkaido, Japan
(北海道)



1) 会議中でのそれぞれの役割

主に参加者の受付と第3会場の同時通訳レシーバーの管理を行いました。

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

プレゼンに関しては後の事項でも書こうと思うのでここではあえて懇親会のお話をしたいと思います。懇親会では著名な教授や学者さんから市長の方まで様々な方がいらしていました。会議とはまた違った雰囲気で自分にとって非常に新鮮な雰囲気でした。自分は何人かの方とお話をさせて頂きましたが、やはり直接話すことの重要性を感じました。普段ネットや論文、本だけでは得られない情報、ネットワークの構築など、直接会話をすることによって得られると思います。そして、この場で感じた自分の課題は積極性です。自分は多少遠慮をしてしまい、何人か話してみたい方がいらっしまったものの、話ができずに終わってしまいました。このような場で、自分の英語がどれだけ拙い物だとしても、恥ずかしがらずに自ら話しかけられるようになりたいと今回強く感じました。

3) 今回の会議を通して何を考えたか

今回の会議を通して、再生可能エネルギーの持続可能性について考えました。例えば僕が担当した会場では、市民出資による太陽光発電事業の事例についてのお話を聞きました。会社を立ち上げると同時に市民の出資者を募集して、出資者には利益が分配されるという仕組みです。資金循環を活発にさせることによって、持続可能な地域づくりが行われます。決して利益を追求することが目的では無くて、地域の資源をフルに活用することが重要であると仰っていました。地域に富が生み出されることによって、相互に互恵・信頼関係が構築されると私は考えました。これも再エネの持続可能性による、地域活性化の一例だと思います。エネルギー問題は、人間、企業、社会のあらゆる面で大きな関わりを持っていて、福島での原発事故以降、持続可能性は重要なテーマの一つだと今回の会議で改めて感じています。自分が今後の社会をどうしたいか考えた時、ご当地エネルギーは必要不可欠な存在になってくると思います。

4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと。

皆さんは「再生可能エネルギー」という言葉を聞いて何を思い浮かべるでしょうか。太陽光、風力、地熱、バイオマスなどの発電方法が思いつくのではないのでしょうか。自分もISEPでインターンを始める前までは、ハード面ばかりに目が行きがちでした。しかしこれらの再生可能エネルギーは、前述した持続可能な社会を構築するためへの様々な背景があります。自治体、行政、条例、景観、地域主導、トラブル…。実はこれらのキーワードも、再生可能エネルギーに大きく関係しています。今回のご当地エネルギー会議で話された内容も非常に多様でした。ISEPで関わる分野も非常に幅が広いので、多種多様な事が学べると思います。

5) 10年後、会議に登壇した場合、話したいことは何か。

10年後、政策、エネルギーを含め何が起きているかは分かりませんが、再エネが地域に普及していること、人々にとって身近な存在になっていることを祈っています。エネルギーの転換は、産業界全体に大きな影響を及ぼすので決して簡単なことでは無いと思いますが、今回の会議でドイツやデンマークのような先進国からアフリカのレソトのような発展途上国の話を聞いていく中で、まだできることがあるのではないかと素人ながら考えていました。自分が登壇したら、日本は再エネに関してまだまだ大きな可能性を秘めていることを話せるようになりたいです。

6) 開催地の福島について思うこと

私は、1年間だけですが福島に住んでいたことがあります。この会議では会場周辺だけの滞在でしたが、久しぶりの福島は非常に感慨深い物でした。震災が起きた中学3年生の当時、当たり前かもしれないですが、自分の無力さを痛感して少しでも復興に貢献したいと思うようになりました。しかし5年経った現在では、自分を含め震災が風化しつつあります。懇親会の際に被災された高校生の方とお話をしましたが、まだ終わっていない、むしろ復興はこれからだということを強く実感して、自分の目標を見つめなおすきっかけになりました。今回の会議では福島と同じことを繰り返さないための意識が共有された場でもあったと思います。将来自分がどういう形で貢献したいかはまだ定まっていませんが、今は自然エネルギーの観点からできることを探したいと思っています。

遠藤

endo kanae

College: Kogakuin University
(工学院大学)

Degree: Faculty of Engineering
(工学部環境エネルギー化学)

Hometown: Yamagata, Japan
(山形県)



1) 会議中でのそれぞれの役割
受付・第2会場のレシーバーなど。

2) 会議を通して最も印象に残ったことを1点(プレゼンや懇親会も含む)

会議ではレシーバーを担当しており、登壇者の話を聞くことができました。その中でも印象に残った話は「同じ場所で異なる夢を見るのではなく、異なる場所で同じ夢を見る」といった話でした。自治体が企業を誘致し、企業は再エネ設備を整えるのが再エネの普及に繋がると考えています。しかし、企業が利益だけを目的とした場合、当事者間で意見の違いが生じたり、住民から批判されるなど事業がうまく進まないようです。また、広大な敷地を必要とする「メガソーラー」とその土地の「自然保護」という観点でも、環境にやさしいという同じ目的に向かっているはずなのに対立が生じます。再エネはもちろん普及すべきだと思いますが、なにごとにも利害が絡んでくるので一筋縄ではいかないことだと感じました。今回の会議では「異なる場所で同じ夢を見る」方々が集まっているのだと思い、心強い気持ちになりました。

3) 今回の会議を通して何を考えたか。

国際会議に立ち会う機会はもちろん初めてで参加者の数に驚きました。世界各国から来場し、当初の予想を超える述べ600人が参加したようです。参加者がそれぞれのバックグラウンドを持ちながら持続可能な社会という同じ目的を持ってこの会場に集っていました。会議では講演者と傍聴者の意見交換も行われており活発な議論の場となっていました。会議の最後に福島ご当地エネルギー宣言が福島市長により読み上げられ参加者が合意した際は、会場が同じ目標に向かおうとする一体感がありました。このような機会に立ち会えることをとても光栄に感じましたし、この会議が今度は別の場所で2回、3回と続けられ同じ意思を持った人が増えていけばいいなと思います。

4) 未来のインターン生や知人友人に伝えたいこと

今回は国際会議だったため会議の使用言語が日本語と英語でした。私自身理系の学問を学んでいるため、英語に触れる機会が少なく、コミュニケーションの部分で苦戦しました。今後もっと英語の勉強を頑張らないといけないなと感じました。今回の日程には会議で登壇したスピーカーの方や参加者と意見交換できる懇親会などがありました。インターン生もその場に出席しましたが、私は積極的にそのような方々とはあまり話すことが出来ませんでした。プログラムのことや興味がある分野の方にもっとお話を伺えばよかったと反省しています。また、再生可能エネルギーを多角的な視点で考えることは重要だと思いました。今回の会議の議題はご当地エネルギーで必然的に似たような考えの人が議論を盛り上げていましたが、世の中には政治的、宗教的に様々な考えの人がおり、一言に再生可能エネルギーといってもいろんな考え方があると思います。自分の中の意見を持つべきだと思います。

5) 10年後会議に登壇した場合、話したいことは何か

私はとても登壇し、話す立場ではありませんが、しいて言うのなら地方創生についてお話したいと思います。私は地方の出身で地元には広大な土地があり、私の目からは多くの資源があるように見えます。しかし、私の地元は再生可能エネルギーという観点で遅れていると感じます。雇用や人口流出など経済的にも創生のために転換が求められると思います。今回の会議ではコミュニティパワーがテーマでプログラムでも地方創生について話されている方がいました。行政や企業、市民が一体となって再生可能エネルギーを普及させたというようなお話でしたが、とても感銘を受けました。再エネを普及させるためには様々な課題がありますが、私自身、もっと学んでいきたいと思います。

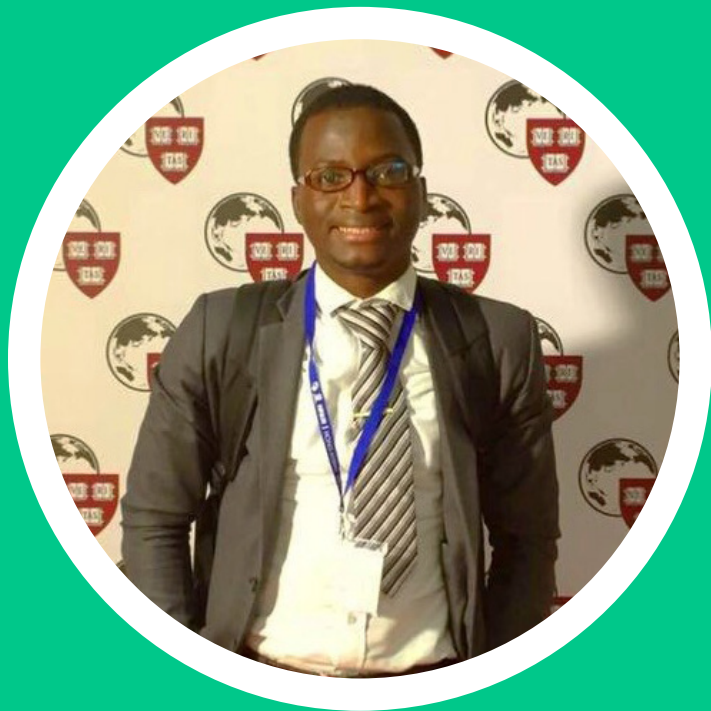
6) 開催地福島について思うこと

会議の前日のレセプションパーティーの際に三味線奏者の方のお話を聞きました。その方は震災当時原発の近くに住んでおり、ふるさとから離れるのを余儀なくされたそうです。事故から5年が経ちましたが、自分を含め人々の記憶から事故の悲惨な状況や被災された人への思いが薄れているように感じます。今回の会議では福島での悲劇を繰り返さないため、参加者が再度ご当地エネルギーへの意思を共有できた機会だと思います。また、復興が進んでいることや再生可能エネルギーの取り組みを世界に誇示し、福島から発信した会議だったのではないかと思います。

ザカリア

zakaria zoundi

College: Kobe University
Major: International Development Policies
Hometown: Burkina Faso



1) What was our role?

As an intern, I was in charge of participants' registration and guidance, questions/ answers sessions monitoring, and checking the conference materials.

2) What presentation we liked the most and why?

Coming from a West African country, the presentation I liked the most was the one related to Mali, presented by Dr. Ibrahim Togola. The presentation was about the wind power energy experience in Mali. Weather challenges in Mali reflect the realities and challenges faced by the West African region. His presentation showed how a low income and landlocked country can reach a sustainable, clean and free energy through the efficient use of nature

3) Any other important information for future interns

I encourage future interns to interact a lot with the speakers and participants, raise questions, discuss their dreams, their career, and their research interest. The WCPC is full with amazing specialists and practitioners. They are all willing to share their views with us, we just need to approach them.

4) Personal Reflection

The WCPC is skyrocketing and nothing is going to stop it. My only recommendation is possibly increasing the number of youth participants who attend the WCPC, such as graduate students, startups, and CEOs. They will gain a lot of insights from the WCPC.

5) In 10 years, what would you present about at a similar conference?

"How solar energy has changed people's life in Burkina Faso."

沖川

emi okikawa

College: Franklin & Marshall College '17
Major: Environmental Studies
Minor: East Asia Area Studies
Hometown: Honolulu, Hawaii

1) What was our role?

Interns were very much integrated into the conference-running process. I worked at the reception desk and greeted conference participants from 131 different countries!

2) What presentation we liked the most and why?

The panel I enjoyed the most was the "Next Practice Goals for 100% Renewable Energy for Regions and Islands" session. I was interested in Dr. Baker (UH Law) and her talk concerning Energy Democracy and Justice in Hawaii--my hometown. I was also inspired by Mrs. Lane's talk regarding Australia's first community-owned windfarm, and her methods on facilitating community engagement practices and its impacts of the renewable energy movement.

3) Any other important information for future interns

Bring your business cards! Attending the 2016 WCPC was an incredible opportunity for mingling with experts and businesses from all over the world.

4) Personal Reflection

It was inspiring to see that such a strong coalition of solidarity for Renewable Energy, spans both country borders and business sectors alike. Attending this conference has made me think more critically about the role of community and stakeholder engagement in promoting renewable energy.

The issue of Environmental Justice is particularly important to me, and I was intrigued by Mrs. Noordhoek's talk about the burgeoning Energy Democracy movement in Hawaii. She mentioned that Moloka'i, her hometown, has a very long history of Environmental activism. Their latest fight has been to reject plans for a major wind farm that would supply energy to Oahu, but otherwise ignore the Moloka'i population. As a resident of Oahu, it suddenly struck me that "renewable energy" and "environmental justice" do not always work in tandem. Once again, I am reminded that community engagement and solidarity are both extremely important components affecting the efficacy of the renewable energy movement.

5) In 10 years, what would you present about at a similar conference?

"Environmental Justice Issues in Hawaii: Energy Democracy."



クララ

clara ferretti

College: Universidad Catolica de Avila (Spain)
Masters Degree: Management and
Development of Renewable Energy
Hometown: Nancy, France



1) What was our role?

The interns played an integral role during conference preparation.

We were assigned the following tasks:

- Guide for the speakers when they arrived at the train station
- Reception desk tabling to assist participants when they arrived
- Receiver collector
- Photographer

2) What presentation we liked the most and why?

The conference introduced different renewable energy projects from 131 countries around the world, all working to reduce both the dependence on fossil fuel and the GHG emissions. Several companies' representatives presented past and under-development projects. To see how all those countries are making efforts to fight against global warming was really interesting.

For this reason, I think the "Good and Next practice for 100% RE Regions & islands" session was the most interesting. During this panel, people from different countries explained how they promoted renewable energy in their city or region. It was great to see how some places are committed to the advancement of renewable power generation.

3) Any other important information for future interns

It is important to foster a better understanding of the renewable energy movement. One of the most important parts of the conference was the networking opportunities.

4) Personal Reflection

A lot of renewable energy projects are developed locally but it seems that there is no national consensus to develop the renewable energy. Each locality tries to develop new projects but they don't work together to develop projects at the national scale. In fact, project ideas seem to come from the private sector because of the nature of the FIT scheme.

Japan differs from France greatly. In France, public institutions create the need. Public institutions analyse the energy needs at the regional or national scale and facilitate investment based on interest levels. In Japan, the renewable power businesses and the public administrations do not analyse nor create the need...the private sector does. Once again, it is due to the nature of the FIT scheme which allows developers and investors to develop projects together with minimum involvement from the local government concerning the capacity. Often, though, the Environmental Assessment threshold presents a limitation on optimizing the profitability while avoiding any delay and additional costs due to the assessment.

5) In 10 years, what would you present about at a similar conference?

I would like speakers to provide more feedback regarding project development and operation phases. They presented the key figures of their power plants but did not speak about the challenges (authorization, compromise, eventual odds from the part of people who were living close to the installation...) they met and how they eventually resolved those challenges. This insight would be helpful for project developers and investors attending the conference. Feedback on the project development and operation phases is the real added value of a conference because most of the time it cannot be found on internet. Focus on high value data is the key for countries in terms of renewable energy.

I also got the feeling that although everyone agrees to change things but few really know how to “make it happen”. For example, in the geothermal power business it is difficult to use hot water source because of onsen. In this case, support from local government to explain that there is no issue concerning the use of water for geothermal purpose is important. However, support from the local government is not a big deal, a municipality will always welcome a project creating local employment and local taxes. The challenges remain in: political incentives, project development expertise and financing.

- Political Incentives: the most important one is the FIT, developers and investors appreciate it because it is one of the most important.
- Financing: Japanese banks provide one of the cheapest debt in the world. At a very good price of electricity (FIT), it allows low-profitability projects (renewable power projects) to materialise in Japan. However; when FIT decreases, interest of investors decreases and thus the number of projects decreases as we can see with the solar business. Thus, it could be great to discuss the future of feed-in-tariff during the conference in order to attract more investors, financing being the lifeblood of the projects.
- Project development expertise: As discussed before, this is the most valuable information.

2016

第1回世界ご当地エネルギー会議

1st World Community Power Conference

インターンレポート：2016年12月14日発行 Intern Report Issued: December 14, 2016

Editors: Kou Takigami & Emi Okikawa